

会員の広場



読書の愉しみ

—アガサ・クリステイの場合

廣中 聰 (東京)

小学生のころから、「探偵小説」が好きでした。ホームズ、ルパン、さらにいわゆる本格（謎解き）もの、米国の法廷ものなど、乱読を続けてきました。中でも、表題のアガサ・クリステイは、「そして誰もいなくなった」「ABC殺人事件」「オリエント急行の殺人」など今も読み返します。

この三月、評伝「アガサ・クリステイ」（23年邦訳）と未読だった自伝（邦訳1995年）を手に取りました。彼女は、いかにして「ミステリーの女王」といわれ、百カ国強、約二十億冊と世界中で愛されるようになったのか、大いなる関心がありました。アガサは、1890年生まれ、享年85。何が魅力だったのでしょうか。まず、トリックの奇抜さ、小柄のベルギー人ポアロの「灰色の脳細胞」の謎解き、舞台となる戦間期から戦後の富裕層の生活環境及び旅を通じての大英帝国植民地、中近東の活写が挙げられます。

アガサについて、未解明点も含めて謎ときをしていきましょう。

けた外れの成功の謎。当初の出版部数は、

数千部でした。伸びたのは、失踪のスクャンダルが契機です。米国への本格進出。宣伝「クリスマスにはクリステイを」。演劇化、映画化効果。前者では、「ねずみとり」「検察側の証人」。後者は、「オリエント急行の殺人」。彼女の失踪の謎。1926年失踪。英国中を騒がせ11日後発見。「評伝」では、詳細に分析・叙述されていますが、60年後の「自伝」では触れていません。彼女にとって最重要の家族愛生活の喪失、（母の死）（初婚の破綻）による精神的打撃によるものとされます。

意外に少なかった財産。大きかったのは、戦費負担の90%弱までの累進課税のようです。また再婚した考古学者のイラク、シリアでの発掘費用の負担。戦時労働者期を除き、幼

少期の富裕な生活スタイルを生涯維持したことでしょうか。二度目の、懸念され反対もされた13歳年下の考古学者との結婚（40歳時）の成功の謎。お互いに高めあった「友愛結婚」と言えるでしょう。歴史上の人物、ディズレーリは、33歳時12歳年上の寡婦メアリー・アンと結婚しているのですから、人生いろいろです。私にとって未解明なのは、ペンネームに「クリステイ」（前夫性）を生涯を通じ、使い続けたことです。

「自伝」「評伝」を読んで、愛読してきた背景が分かったような気がしています。孫のマシューによれば、彼女は常に「生きている喜び（シヨワ・ド・ヴィービル）」を感じていたとのこととで、それも読者を魅したのでしょうか。